

教育的意義が教員のリスク認知に及ぼす影響の研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 愛知教育大学・静岡大学 公開日: 2022-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 満下, 健太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00028792

(課程博士・様式7)

学位論文要旨

専攻：共同教科開発学専攻 氏名：満下 健太

論文題目：教育的意義が教員のリスク認知に及ぼす影響の研究

論文要旨：

本研究では、学校では事故発生のリスク(以下、単にリスク)の低減が必ずしもよりよい教育活動の実施へと繋がらない特殊な環境であることを問題意識とし、教員のリスクマネジメントを検討する。本研究では特に、教員のリスク認知という観点から、活動の教育的意義がリスク認知に対してどのように関連しているかを明らかにする。具体的には、学校活動に対するハザード認知や主観的なリスク評価、そして教育的意義を測定してそれらの関係を明らかにし、リスクマネジメントプロセスにおいてどのように働くかを明らかにする。

第I章では、これまでの学校リスクに関係する先行研究を概観し、m-SHELLモデルを参考に整理を行った。先行研究では、学校の管理の事故発生要因について、主に統計データを用いた事故発生状況の分析と、要因のマッチングによって、そのリスクの変動が検討されてきた。他方、近年では学校特有の要因として、教育的意義の存在が指摘されている。具体的には、安全教育や困難克服の観点から、教育的意義を高めようとすることで活動のリスクの過小評価や無視が生じるとされてきた。この指摘は事例に基づくものであり、心理学的にそのような過程があるかは十分な検討がされていないことを問題として、本研究の目的を設定した。

第II章では、方法論的枠組として、これまでのリスク認知研究の発展および問題点、およびその解決方法について文献的研究を行った。従来、リスク認知においては、対象の持つ性質についての心理的な評価(これをハザード認知と呼ぶ)が主観的なリスク評価に強く影響することが、Psychometric Paradigmと呼ばれる研究枠組によって指摘されている。しかし、Psychometric Paradigmには分析上の問題があるが、これは三相因子分析法を適用することで解決することも指摘されている。同分析法の適用は、単純に問題を解決するだけでなく、人は対象のどのような特性に注目してハザード認知を形成するのか、そしてその対象と尺度にはどのような関係があるかといった構造を詳細に明らかにできる。従って、本研究においても、学校でのリスク認知やハザード認知の構造を精緻に明らかにすることが期待できる。以上の議論より、本研究の方法論的枠組を Psychometric Paradigm に基づいて構築した。具体的には、ハザード認知と教育的意義、そして主観的なリスク評価を測定し、それらの関係を三相因子分析法によって検討する。

第Ⅲ章では、第2章で検討した枠組を用いて、大学生を対象に、(1)ハザード認知や教育的意義はどのような因子構造を持つか、(2)それらの因子は主観的なリスク評価とどのような関係があるか、その基礎的な傾向を検討した。三相因子分析の結果として、尺度では3因子(恐ろしさ・制御可能性・教育的意義)、評定対象では3因子(接触・非接触・非日常種目)、そして6つの因子得点次元が得られた。核行列の解釈から、教育的意義には2種類が認知され、一つは種目全体を問わずに認知されている意義、もう一つは非日常的種目のみ見られる、恐ろしさと関連した意義であり、「非日常的経験への挑戦的意義」と解釈された。また、重回帰分析の結果、組体操では恐ろしさと教育的意義の両者を高く評定する人ほど主観的なリスク評価が低くなる傾向が見られた。すなわち、挑戦的意義を認知する者はリスクを低く見積もる認知バイアスが存在する可能性が示唆された。

第Ⅳ章では、前章で得られた知見について、小学校教員を対象として結果が再現されるかの検討を行った。三相因子分析の結果として、尺度では3因子(恐ろしさ・制御可能性・教育的意義)、評定対象では3因子(克服・定型・接触種目)、そして5つの個人因子が得られた。そして、第3章と同様の教育的意義には2種類が認知されていた。一つは全体に共通する教育的意義、もう一つは克服種目のみに見られる挑戦的意義であった。また、重回帰分析の結果、克服種目(水泳・持久走)では恐ろしさと教育的意義の両者を高く評定する人ほど主観的なリスク評価が低くなる傾向が見られた。これらの結果から、実践経験を積んだ教員であっても、挑戦的意義を認知するとき、主観的なリスク評価に対して認知バイアスが架かる可能性が示唆された。

第Ⅴ章では、教員を対象としたインタビュー調査を通して、教員のリスクマネジメントプロセスを明らかにすると共に、(1)リスクを含む活動には具体的にどのような教育的意義が認知されているか(2)前章までの知見が、学校現場のリスクマネジメントプロセスの中でどのように働くかの2点を検討した。インタビュー調査から得られたデータは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手続きによって分析がなされた。(1)に対する結果として、克服種目では実際に挑戦的意義が認知されていた。一方で、それは苦手や困難への挑戦であり、リスク経験への意義は付随的であった。(2)に対する結果として、教員のリスクマネジメントプロセスでは、①教育的意義の重視によってリスクへの無自覚②活動の伝統性・風土的要因という特有の背景によるリスクの無視の2つの特徴が見られた。また、適切にリスクを受け入れるためには、実践経験によるリスク認知の向上や子供に寄り添った指導の実施など、教員の個人的資質の向上の必要性が考えられた。

第Ⅵ章では、研究の総括として、本研究の成果と実践的示唆、限界と展望が議論された。得られた主要な成果として、教育的意義はリスク認知に影響を及ぼし、挑戦的意義を認知する時、それがリスクの無視の要因となる可能性を実証的に明らかにした。また、学校風土も関連することが示された。実践的示唆として、学校リスク研究における心理社会的要因の検討の必要性、そして、安全かつ意義の高い教育活動を実践するための方略として、(1)教育的意義とリスクの両者を勘案した意思決定、(2)学校リスクの精緻な評価が提案された。